

赤十字

Japanese Red Cross Society NEWS

NEWS

10

OCTOBER 2026
#1037

赤十字NEWS
オンライン版はコチラ



特集 ▶ P.2

令和8年熊本地震

熊本でつながる、 支援のバトン

「災害関連死」を防げ!

配布した救援物資



毛布・タオルケット

約**670**枚配布

※9月10日時点の情報



安眠セット

約**2244**セット
配布

日赤は…

- 毛布・タオルケット
- 安眠セット など

職員の派遣



医療救護班

延べ**156**班を
派遣



CoT

延べ**62**チームを
派遣



「こころのケア」班

延べ**36**班を派遣
※調整班含む

日赤は…

- 医療救護班
- CoT (P.3に詳しく解説)
- 「こころのケア」班

酷暑の避難生活… そのとき日赤は?



被災地に水がない!

断水した避難所で
プールの水を浄水し
手洗い場・洗濯機を設置



日赤は…

- 手洗い場を復旧＝衛生支援
避難所における「感染症予防」に貢献
- 体育館から約200メートル離れた
プールを水源に活用
- 国際救援のノウハウが生きた!



助かった命を
失わせない!

Present!

A | ハートラちゃん
ナノブロック(新商品)と
メモ・ふせんのセット
5名様

B | ハートラちゃん
ナースウォッチ
(新商品)
3名様

詳しくはP.7をCheck! ▶



CONTENTS

TOPICS

全国から、熱い応援をありがとう!!
推しハートラ応援アワード結果発表! …… P.4

気候変動をテーマに、昔話から、未来を考える
「にほんみらいばなし」公開 …… P.5

連載

海外派遣の現場から ルワンダ共和国編 …… P.4
今日も笑顔のために …… P.5

AREA NEWS

[京都] 「命を救うおしごと」に
子どもたちが挑戦

[千葉] 千葉県豪雨災害
赤十字病院の医療チームと
ボランティアが活躍 / 他 …… P.6

WORLD NEWS

ベネズエラ、コロンビア、インドネシア地震災害
揺れる世界。その被災地に赤十字がいる …… P.8

SPECIAL
FEATURE

令和8年熊本地震 熊本でつながる、支援のボタン



7月28日に発生した熊本地震。

日赤は、発災直後から救護活動や避難所支援を開始。

そこには、職員やボランティア、さまざまな立場から「救う」活動に全力を注ぎ、被災者の思いをくんで最善を尽くす姿がありました。

現地から5人の活動を紹介します。



Voice 現場の声

1

日赤熊本県支部
講習係長

えがみ しほ
江上 詩帆 さん

避難所運営を支援

「避難所で高齢者が心肺停止したら？」
運営者の不安を聞き、救急法を指導

それは、八代市で避難所運営をしている団体が赤十字救護班に吐露した不安から始まりました。「この避難所は高齢者が多い。この方たちが、急に倒れたり心肺停止したり、万一のことが起きたらどうしよう…。BLS講習*を実施できないか?」。それを聞いた救護班が「すぐに講習用の人形とAEDトレーナーを持ってきて」と、日赤熊本県支部に連絡。真夏の避難所生活は高齢者には過酷です。講習の日時や参加者募集など「計画」している間に体調を崩す方が出てもおかしくありません。大急ぎで講習用の人形とAEDトレーナー3セットを用意し、救急法の指導員資格を持つ私と、他県から応援で来ていた日赤職員二人で避難所に駆けつけました。運営の方々は驚き、「相談したら、こんなに早く来てくださるなんて! すぐに人を集めます!」と、その場で講習がスタートする流れに。集まったのは10代から60代までの運営スタッフ12人ほど。初めてAEDの操作や胸骨圧迫をする方もいて、講習の最後には避難所内のどこにAEDがあるのかも一緒に確認しました。

私は現在、熊本県支部で救急法などの講習を担当していますが、昨年春まで熊本赤十字病院の看

護師でした。10年前の熊本地震の発生時は、たまたま熊本を離れ東京都内で研修を受けており、大混乱に陥りながらも基幹病院として被災者の治療にあたる病院の救護活動に従事できませんでした。そのことがずっと心残りでしたが、支部職員として今回の災害と向き合うことで、当時の申し訳ない気持ち、力になれずに苦しかった気持ちや少しづつ消化している感覚もあります。以前、日赤の本部の研修で、講師の方に「**赤十字は絶対に見捨てないから**」と言われたことがあります。聞いたときは正直、具体的なイメージが湧かなかったのですが、今回、全国から赤十字救護班が入り替わり立ち替わり駆けつけ、熊本のために活動してくれる光景を見て、その「見捨てない」姿勢と行動力を、身をもって感じています。

*心肺停止や呼吸停止に陥った人に対し、救急隊や医師が到着するまでの間に行う応急手当「一次救命処置(Basic Life Support)」の知識と実技を学ぶ講習。

Voice 現場の声

2

熊本市立清水中学校
校長
(熊本県青少年赤十字指導者協議会長)

こさき ひろゆき
小崎 洋之 さん

赤十字ボランティア

最前線で救う人々が動きやすくなるように
後方支援は赤十字ボランティアの醍醐味

10年前の熊本地震で気づきました。最前線で人を救う人たちが、より動きやすくなるように、「後方支援」が重要なのだ、と。赤十字ボランティアのやりがいはいまにそれです。地震の後、私が校長を務める中学校も避難所になりましたが、数日で解除となり、そこに舞い込んできたのが、支部からのボランティア要請。本社から駆けつけた日赤職員を被災地へ運ぶ運転手の募集でした。すぐに手を挙げ、支部に向かうと、職員の方々が目まぐるしく動かれ

ていて「**今こそボランティアの力が必要だ**」と感じましたね。無事に運転業務を終え、挨拶して帰ろうとしたら「救護倉庫を見ていきませんか?」と。喜んで応じたところ、倉庫では大量の救援物資を車に積んでいる真っ最中。うずうずして手伝わずにはいられませんでした(笑)。最前線で動く赤十字は、その内部で何層にも支え合うことで、初めて被災者が求める支援を届けることができるのだと思います。私はJRC*の指導者なので、ふだんから生徒たちに「利他」の心を伝えています。今回は私自身が、支え合う赤十字の一員になったことを光栄に思います。

*青少年赤十字



熊本県支部に駆けつけ、業務の説明を受ける小崎先生(左)。車両運転のボランティアとして参加

Voice 現場の声

3

熊本赤十字病院
国際医療救援部

とみた かほ
富田 香秀 さん

避難所を支援

「手を洗える」「洗濯できる」という普段の生活では当たり前のことが、避難生活で、いかに重要か。私たちの給水・衛生支援は、まさに「命と健康を守る」ことにつながる活動でした。

熊本赤十字病院は、海外で災害が発生した際に川などの水源を浄水して、シャワーや手洗い場などを設置する「WASH*」チームが在籍する日赤施設の一つです。日頃から人材育成や資機材整備を行い、海外だけでなく能登半島地震でも活動しました。その実績から、今回は断水が続く避難所(八代市内の中学校)で活動することになりました。

活動前に状況を確認したところ、手洗い場が断水のため使用できず、トイレ利用後に十分に手洗いができていないとのこと。さらに、下痢や腹痛を訴える方も増えており、衛生環境の改善が急務。そのため、トイレ周辺に新たな手洗い場を設置することになりました。

まず事前に衛星写真などで周辺の水源を探し、避難所となっている中学校の体育館から約200メートル離れたプールの水を活用する計画を立てました。しかし、その距離を手持ちの資機材でつな

被災者を苦しめた「断水」
国際救援の「給水・衛生支援」
ノウハウが生きた

げられるか、また途中のグラウンドが避難者用駐車場になっており、車両によるホースの破損の心配など、多くの不安が…。ところが、現地に到着すると、避難所を運営する皆さんが家庭用ホースを何本もつなぎ、プールから避難所まで水を引いてくださっていたのです! おかげで無事に手洗い場を設置することができました。また、避難されている方から洗濯ができず困っているというお話を聞き、翌日には近隣住民も利用できるように屋外に洗濯機を設置しました。活動中、赤十字のマークを付けた私たちが水道工事のような作業をしている姿を見て、「日赤って、そんなこともするの!？」と驚かれたり、避難者の健康支援をされている方には「**避難者の健康を守る環境が整った**」と喜んでいただきました。

私たちWASHチームは水そのものを被災地に持っていくことができません。水源の利用を認めてくださる地域や行政の方々、そして避難生活を送る皆さんのご理解とご協力があって初めて支援が成り立ちます。今回は「災害支援は多くの人の力で実現する」ことを改めて実感した活動となりました。



(写真・上) WASHチームで手洗い場の水道を設置する富田さん(右) / (写真・下) 断水している避難所に洗濯機を設置
* [Water, Sanitation and Hygiene] の略。水と衛生の総合的な分野を指し、災害時に安全な水の確保や環境衛生の改善を行う。

Voice 現場の声

4

金沢赤十字病院
副部長

とがし じゅんじ
富樫 純治 さん

熊本県支部をサポート

能登から熊本へ
あの時の「苦悩」と「感謝」を忘れない

今回の地震発生の直後、福井県や富山県など近隣8県の支部と派遣を調整する中で「できれば石川県のチームを、最初に行かせてもらえないか」と申し入れました。2024年の能登半島地震の恩返しとして。そして、「支援を受けた側」として得た教訓を、次につなぐために。救護活動の進化に貢献することも、受援を経験した者の使命だと思います。

こうして希望が叶い、8月2日にCoT*として熊本に入りましたが、2年半前の能登での活動を思い出す一方で、被災者の苦しみは災害ごとにこんなにも違う、と思い知らされました。正月に地震が発生した能登では、電気も使えない中、どうやって厳冬の寒さをしのぎ命を守るかが課題でしたが、今回の熊本の場合は、酷暑の中、どうやって熱中症を防ぎ、避難者の健康を守るかが課題。また、10年前の熊本地震では亡くなった方の8割が、地震後の避難生活などが原因で命を失う災害関連死だったことから、全赤十字が「災害関連死を0に」という大きな目標を掲げていました。そのため、熱中症や車中泊によるエコノミークラス症候群、DVT(深部静脈血栓症)の予防のため、行政や警察とも協力して



被災地の情報を収集・分析し、救護班等の活動調整を行うCoT (写真・下・右が富樫さん)

Voice 現場の声

5

熊本赤十字病院
看護師
(看護部兼国際部 係長)

こばやし けんご
小林 賢吾 さん

熊本県支部をサポート

熊本で磨かれた、「つなぐ力」
必要な支援を確実に届けるために

熊本では日赤の病院と支部が同じ敷地にあり、定期的に合同で災害訓練をするなど密な関わりがあります。一方、災害が起きると、「支部は支部」「病院は病院」で動き始める傾向がありました。

今回の地震で大きく変わったのは、**支部と病院が一体となって支援体制を組み立てたことです**。熊本赤十字病院は、2016年熊本地震、2020年7月豪雨、能登半島地震などを通して、必要な支援を確実に届けるには、現場で動く救護班だけでなく、全体を

見て支援をつなぐ「コーディネート」が重要だと学んできました。

私は平時は手術室で勤務し、災害看護専門看護師としても活動しています。今回は院長の指示で発災直後から県庁の保健医療福祉調整本部に入り、その後は支部の災害対策本部でも、被災者の健康と生活への影響を見ながら、県庁⇄支部⇄地域の活動拠点をつなぐ調整を行いました。災害医療コーディネーターの医師、DMAT、地域の保健師とも連携し、組織を越えてつながることで、被災者の健康と生活を守るために必要な支援をより確実に届ける体制が、熊本で形になりつつあると感じています。

啓発を行いました。

災害後の状況が異なっても、能登と同じだと感じる部分もありました。ある避難所で保健師さんと支援の相談をしていたら、その保健師さんが涙をこらえきれなくなり…。自身も被災者なのに、支援側として休むこともできず、心も体も耐え切れなくなる。赤十字が救うのは、避難生活を送る方だけではありません。被災地で苦しむ全ての人が私たちの救護の対象です。そのため、**「こころのケア班」が「支援者のための支援」を行っています**。

こうした、さまざまな課題に直面する中、助みになったのは、能登に支援に来てくれた全国の赤十字関係者との再会です。同じ赤十字の原則(視点)で動き、本音を語る。 「赤い服」の仲間たち。全国どこで災害が起きても、この赤十字のネットワークがあれば、被災者を救うことができる、と確信しています。

CoT*

災害医療コーディネートチーム。先遣隊として被災地へ派遣され、保健医療ニーズの把握や関係機関との連絡調整、全国から集まる医療救護班の管理を行う専門チーム。CoTは救護班のように被災者を直接診察することはないが、例えるならば**「1つの救護班で100人を救う」能力を「10個の救護班で1万人を救える」ように救護力を最大化する役割**を担う。



熊本県支部で支援業務に携わる小林さん(左)

熊本赤十字病院の
災害医療コーディネーターの
活動はこちらでもご紹介



T P I C S

1
TOPICS

全国から、熱い応援をありがとう!!

押しハートラ応援アワード 結果発表!

8月号で告知した「押しハートラ応援アワード」に、全国から熱い応援が続々! 47都道府県のご当地ハートラちゃんの中で、特に人気を集めたのは? 得票数TOP3をはじめ、みんなの“ハートラ愛”あふれる応援コメントとともに紹介します。



押しコメント

「すっぱ可愛いハートラちゃんの表情が素敵。お好み焼き、牡蠣だけではなく、レモンの魅力もあるぞ!」「ニコニコではないキャラクターは珍しく、他県にはない唯一の表情がかわいい!」

担当者に聞く! 誕生のヒミツ

「もみじ饅頭や牡蠣など、広島らしい案がずらり。その中から職員全体で総選挙を行い、選ばれたのが爽やかな印象のレモンでした!」



押しコメント

「ハートラちゃんに衣をつけて揚げたような勢いに驚きました。しっぽがエビフライでかわいい。きみがダントツ1位だ!」「全身をエビフライにする発想が斬新。そしてとてもかわいい。日赤支部・施設の方のハートラ愛の強さを感じました!」

担当者に聞く! 誕生のヒミツ

「ふわふわとした衣の質感やエビフライのしっぽなど、特徴をハートラちゃんにどう落とし込むか、試行錯誤を重ねて完成しました!」

地元を超えて人気を集めたのは?



得票の
74%が
兵庫県外から!

押しコメント

「兵庫がコウノトリで有名なことを全く知らなかったのですが、産婦人科医としてこれを推さなくてはというぐらいお気に入りです!!」

担当者に聞く! 誕生のヒミツ

「ペーカリーやタコ、玉ねぎ、海や山と船など多彩な案が集まる中、地域に偏らず兵庫県全体を象徴するモチーフとして、コウノトリが選ばれました!」

あなたの“押しハートラ”は、何賞?
読むだけで“きゅん”となる全国の
応援コメントも読める!



Vol.9

海外派遣の現場から

ルワンダ共和国編

世界の現場で出会った人々とのふれあい、その土地でしか感じられない息づかい。日赤職員が見た、笑顔や驚き、そして心に残る瞬間をお届けします。

同じ国、まったく違う食卓



リポーター
とりえ あさみ
鳥越 麻実さん

ルワンダで貧しい農村を支援するため、首都キガリで半年ほど生活しました。感心したのは街の便利さです。カフェやレストランが多く、スーパーには肉や野菜も豊かに並びます。さらに「Vuba Vuba*1(ブーバ・ブーバ)」という、Uber Eatsのような宅配サービスまで! 韓国料理や中華料理、あらゆる国の料理が頼め、中でも日本人が経営するタイ料理店のパッタイはお気に入りでした。また、店で食べると出される料理の量が多く、**食べきれなかった料理を持ち帰り、というフードロス減らす工夫もありました。**

キガリのカフェには特徴があります。コーヒーを買うことが女性の生計支援につながる店が多いのです。

その中には、1994年のルワンダ虐殺*2で父親や夫などを失った女性たちの経済的自立を支援するため、ルワンダの名産品・コーヒー豆の生産者に女性を増やす取り組みが広がった背景があります。

一方、キガリから車で4~5時間ほど走り、日赤がルワンダ赤十字社と連携して事業を行うギサガラ郡の農村へ向かうと、暮らしは一変します。舗装されていない山道を進んだ先の村には、食品が買える店はなく、ガスではなく薪で調理。**赤十字の支援によって少しずつ改善しているとはいえ、1日に食事を1回しか取れない人々がたくさん暮らしています。**

日赤はこのような農村で、栄養状態の改善を目指した活動に取り組んでいます。その一つが、母親や5歳以下の子どもたちが参加する栄養教室。家庭菜園や農業指導とあわせて、食材からとれる栄養の学習があり、最後にはみんなで食事をします。実は、この食事を求めて参加する人も少なくありません。栄養について学ぶ



料理実演のあと、母親や子どもたちがそろって食事。栄養について学ぶとともに、参加者にとって貴重な1食となることも

お母さんたちのそばで、子どもたちは食事の時間を今か今かと待っていました。そして、いざ**食事が配られると、人々に笑顔が広がり、会場が温かい空気に包まれました。**一生懸命食べている子どもたちの姿に、この食事が貴重な1食になっているかもしれないと感じ、キガリとの格差に複雑な思いを抱くとともに、この集会在り続け、地域全体の栄養状態が変わり、子どもの笑顔が増えることを願わずにいられませんでした。

*1 ルワンダ語で Vuba Vuba は「急いで」「素早く」といった意味
*2 虐殺で80万人以上が犠牲になり、50万人規模の未亡人が残されたと推計されている

2
TOPICS気候変動をテーマに、昔話から、未来を考える
「にほんみらいばなし」公開

地球規模で起きている「気候変動」は、猛暑や豪雨、干ばつなどを深刻化させ、人々の命や健康、暮らしを脅かす「人道上の危機」につながっています。日赤は、人道支援団体としてこの課題に向き合い、温室効果ガス削減の取り組みだけでなく、**災害により被害を受けた方に寄り添った支援、大雨・台風時に自分と家族の避難行動を考える赤十字防災セミナーの実施など、気候変動に起因する災害から命を救う活動**を進めています。

そして今回、日赤の啓発WEB媒体「SAVE365 Magazine」に新たなコンテンツとして加わったの

が、「にほんみらいばなし」です。誰もが知る「日本昔話」になぞらえ、このまま気候変動が進んだら日本は、世界はどうなってしまうのかを分かりやすく描きます。「桃太郎」や「浦島太郎」など、おなじみの話が思わぬ展開を迎える——。**物語ごとに、猛暑や水不足、海面上昇、豪雨など、気候変動がもたらすさまざまな影響を描いているのも特徴**です。

“もしも”、気候変動が続いたら、どんな未来が待っているのか。

物語の続きは、ぜひ特設サイトをご覧ください。

「にほん
みらいばなし」

「にほんみらいばなし」は
SAVE365 Magazine
特設サイトにて公開中 →

看護師を目指す学生たちへ
日赤の国際活動を紹介

7月26日、日本赤十字東北看護大学のオープンキャンパスで、日赤国際部の佐藤未梨さんが講演。看護師を目指す高校生らに、日赤の国際活動を紹介しました。日赤は、モンゴルやアフガニスタン、ジブチなど、気候変動の影響を受ける地域でも、災害などで苦しむ人々を支援する事業を展開し、赤十字看護師は医療の提供だけでなく、専門知識を生

かしたさまざまな活動に従事しています。また、校内では「にほんみらいばなし」の展示も行われ、世界の気候変動の課題に対する赤十字の活動を伝える機会となりました。



日赤国際部 開発協力課
佐藤 未梨さん
(あり)



「にほんみらいばなし」の紹介や展示も行われました

■日赤の事業地(開発協力)と気候変動の影響例



今日も笑顔のために

今日も明日も、福祉施設の利用者や子どもたちの「笑顔」のために、明るく、全力で。

「あなたと向き合った日々」が灯すもの

福岡県北九州市にある特別養護老人ホーム「豊寿園」が発行する、**広報誌『豊かな樹』**。表紙の撮影、レイアウト、原稿など全てが職員の手作りで、中でも目を引くのが、**入所者の元気な頃から亡くなるまでを克明に記したコーナー「あなたと向き合った日々」**です。

制作を担当するのは、介護課長の森英樹さん。介護の現場に携わる人間ならではの視点で、細やかな看取りの物語を紡いでいます。

「介護職は、“今、この方はどの支援が必要か”と常に考え続け、ご家族のフォローにも心を砕きます。だからこそ、自分の記憶に刻まれ、看取りの記事を書く際には、記憶があふれ出てくるのだと思います」(森さん)

入所される方の多くは最初から寝たきりではありません。介助なしで歩けた方が歩けなくなったり、穏やかだった人が認知症の“混乱期”

になって暴れたり、身体の変化とともに表れる、その方の葛藤や望みに向き合うことも、介護の仕事です。森さんは丁寧にエピソードを紡ぎながら、大切にしていることがあります。

「自分の思いを書き過ぎないこと。ご家族が読むので、故人の姿よりも私の語りが前面に出ることは避けたい。そして、入所者の“人となり”がしっかり伝わること。**介護サービスの記録記事ではありません。“認知症の〇〇さん”ではなく、子煩悩な優しい父だった、苦勞を重ねた働き者の母だった、そういう人柄も伝えたい**」。このために、元気な頃から、出身地や生活歴、好きだったこと、方言などを家族から聞き取り、関わりの深い職員の記憶も重ねながら、その人らしさを少しずつ集めていくそうです。これまで、70人以上を見送ってきた森さん。最期のときに県外に住む息子さんと電話をつなぎ、耳元

赤十字の福祉施設だより

Episode 02

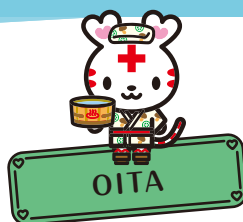
特別養護老人ホーム
「豊寿園」編

「あなたと向き合った日々」はこちらで読めます↑

で「お母さん」と呼びかけてもらいながら旅立たれた方。水も飲めなくなっていたのに、これが最後と、大好きなビールをスポンジに含ませて口に寄せたら、嬉しそうにゴクリ、とされた方。**ありのままの看取りを書くことで、「自分の親の看取りを想像し希望が持てた」という声や、その方を担当していた在宅のケアマネジャーから感謝を伝えられることも。**広報誌は、その人らしく過ごした日々を記録するとともに、家族や支援者の心にも、温かな時間を届けています。



全国各地、あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。



日赤大分県支部では、7月26日と8月2日に「夏休み親子ぼうさい教室」を開催。参加した親子は炊き出しやトランシーバー体験、重りを身につけて高齢者・妊婦の擬似体験をするなど、災害時に必要な備えや心構えを学び

夏休みに防災について学ぼう！ 各地で親子、子ども向け防災イベント

ました。後日、参加児童からイベントで学んだ内容をまとめた自由研究が届き、防災への理解や関心の高まりを感じることができました。(①)

愛媛県支部では、8月16日、小学生を対象に体験型防災学習イベント「赤十字キッズ防災ラボ」を開催しました。参加者は、無線通信や災害時トイレの体験、非常食の試食などを通して、災害時に自分や家族の命を守る知識や行動を学びました。終了後、子どもたちからは「もしも災害が起きたらどう行動するか、家族と話し合いたい」などの感想が聞かれ、防災を身近なものとして考える機会になりました。(②)

福井県支部では、8月23日に市内のスポーツ施設で開催された「防災アリーナプロジェクト」に参加。赤十字奉仕団が防災グッズ作りコーナーで新聞紙スリッパや牛乳パック笛の工作体験を実施した他、ガールスカウトと協力して熊本地震災害義援金への協力を呼びかけました。当日は約700人が来場。ドクターカーや救援物資の展示なども行い、防災意識の向上につながる有意義な機会となりました。(③)



千葉県豪雨災害 赤十字病院の医療チームと ボランティアが活躍



8月13日から14日の記録的豪雨により、千葉県内では甚大な被害が発生。成田赤十字病院では、13日夜の特別警報発令に伴い、各地で交通麻痺などが発生する困難な状況下で災害対策本部を設置し、被害情報の収集を開始しました。

14日には、県の要請を受けて被災病院にDMAT(災害派遣医療チーム)を派遣。電気などのインフラが停止する中、初日は患者を搬送、翌15日には被災病院の「本部支援」に入り、入院患者の転院調

整や暗闇の中での院内移動を主導し、2日間にわたる活動を終えました。

一方、日赤千葉県支部ボランティアは、8月17日に千葉県赤十字災害ボランティアセンターを設置。赤十字防災ボランティアは、被災市町村の災害ボランティアセンターの立ち上げや運営支援、衛生活動に従事し、活動後の手洗い・うがいの呼びかけや、使用した資機材の洗浄など、ボランティアの安全と健康を守る活動を実施。さらに、地域奉仕団や青年奉仕団、看護奉仕団など、普段は別々に活動する「赤十字奉仕団」も力を合わせ、安心してボランティアに取り組める環境づくりに努めました。

高齢者の住居を片付けた青年奉仕団のメンバーは、濡れたじゅうたんの引き剥がし作業に奮闘。「家の中で靴を履かないと歩けないほど床が水浸しでした。高齢のため重い家具の移動ができず、じゅうたんを剥がさないと修繕の業者に入ってもらえないとのことと、そのお手伝いができてよかったです」と振り返りました。また、「豪雨から約2週間以上経っても、たくさんの人が支援を求めていることを知り、改めて被害の甚大さを思い知らされます。そんな中でも、前を向いて懸命に生きる高齢者の方や、ボランティア活動に励む仲間の姿に、元気と優しさをもらいました」と語りました。



「命を救うおしごと」に 子どもたちが挑戦



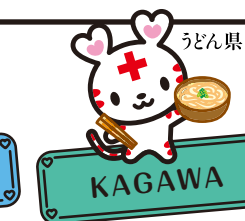
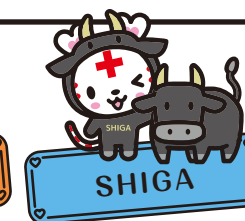
8月2日、日赤京都府支部と京都府赤十字血液センターは、府内の商業施設で、赤十字の仕事が体験できる子ども向けの「おしごと体験」を実施しました。救護班体験では、無線機を使って「夏休みにしたいこと」を隊長へ報告。また、避難所で使う段ボールベッドも、お友達と協力して組み立てました。献血スタッフ体験では、献血ルームに勤務する看護師から指導を受け、献血者役の保護者に問診や血管の確認、腕の消毒を実際に行い、その後は模擬腕を使った採血の様子を見学。参加者からは、「血管を上手に見つけられてよかった」といった感想が。2年連続で参加した子どもも多く、去年は緊張して泣いていた子が、今年は自信を持って笑顔で取り組む姿が見られました。



「赤十字の仲間になろう！」親子で学ぶ赤十字体験教室



日赤神奈川県支部では、8月1～2日、8～9日の4日間、親子を対象に「赤十字 de 自由研究「いのち」を守る体験教室」を開催。延べ172家族434人が参加し、終始にぎやかな雰囲気で大盛況となりました。本イベントは、県内の救護／無線救急／山岳／安全／かながわ赤十字情報プラザ援助奉仕団の5つの赤十字奉仕団の協力のもと実施。“心肺蘇生”や“無線通信”などに加え、「かながわ赤十字情報プラザ」の中を回ってクイズに答える体験を通して、赤十字のさまざまな活動への理解を深める機会となりました。参加者からは、「子どもが赤十字の活動に興味を持つようになった」「家の備蓄を見直すきっかけになった」などの感想が聞かれました。



青少年赤十字(JRC)の「トレセン*」 “周囲を巻き込む人”を育て、地域に還す

*リーダーシップ・トレーニング・セクター



トレセンは、年齢や学校も異なる子どもたちが、指示や号令もない“自律”の集団生活を行い、「気づき→考え→実行する」力を育むと共に、人々の幸福のために周囲を巻き込んで行動を起こせる人を育てるもの。

日赤福井県支部では、7月21～22日に小中学生52人、8月5～7日に高校生31人のトレセンを開催。ドイツと日本の違いを学んで国際理解を深めたり、[LGBTQ][地球温暖化・環境問題]などの社会課題について意見を交わしたり、さまざまな体験を通して思いやりと行動力を育みました。(①②)
滋賀県支部では、8月3～4日の2日間、小・中・高校生64人が参加。班ごとに山道を

巡りながら課題に挑戦するなど、多彩なプログラムを通して、仲間と協働して目標達成する能力を高めました。参加者からは「リーダーは指示をする人ではなく協力者を巻き込む人だと学んだ。学校に戻ったら、この経験を多くの友達に伝えたい」という声が寄せられました。(③)

香川県支部では、8月5～7日に、小中高校生121人がトレセンを実施。グループワークでは熊本地震を機に避難所生活や救護活動に興味を持つグループが多く、実際に被災地で活動したことがある日赤職員に取材するなど、多様な方法で情報を収集し、それぞれが研究の成果を披露しました。(④)

PRESENT!!

プレゼント

A

ハートラちゃん
ナノブロック(新商品*)と
メモ・ふせんのセット

5名様に
当たる!

ナノブロック
サイズ:H65mm x W40mm x D40mm
*日赤サービスオンラインショップで購入可能(ナノブロックは10月下旬に販売開始)

B

ハートラちゃん
ナースウォッチ(新商品*)

3名様に
当たる!

なぜ文字盤が逆さ向き?
腕にクリップで留めて使うため。持ち上げたとき、手元から時刻を確認しやすいよう逆さ向きになっています。

[Base 20 Pulsation]機能って?
脈拍を20回数えるだけで、1分間あたりの脈拍数が分かるナースウォッチならではの機能。1分間ずっと数え続けなくても、短時間で確認できます。

時計部分:直径30mm、長針・短針・秒針は暗所で発光します。

INFORMATION

**日本赤十字社
創立150周年記念サイト**

記念サイトはこちら▼

日赤は2027年5月に150周年を迎えます。これを記念して開設したWEBサイトでは、日赤のこれまでの歩みや、受け継がれてきた思いをさまざまなコンテンツで紹介しています。

その一つが、デジタルブック「赤十字継想録」。ここに書かれているのは、「目の前で苦しんでいる人を救いたい」という思いから誕生し、**何となく救おうと150年間積み重ねてきた赤十字人たちのストーリー**です。下の二次元コードからデジタルブックをご覧ください。

『赤十字継想録』はこちらから▶

日本赤十字社からのお知らせ

常任理事会、代議員会などの
会議開催や予算決算など
財務に関するご案内・ご報告は
こちら▶▶



赤十字NEWSオンライン版はコチラ▶

赤十字NEWSはWEBでも閲覧できます。ぜひアクセスしてください!



プレゼントは
右の二次元コードから
ご応募ください。
応募締め切り:
2026年10月30日(金)
※当選者の発表は
プレゼントの発送をもって
代えさせていただきます

ご応募は
こちらから▶



ベネズエラ、コロンビア、インドネシア地震災害

揺れる世界。その被災地に赤十字がいる

救う



For COLOMBIA

現地で捜索・救助活動にあたるコロンビア赤十字社のボランティア ©CRC

何が起こったの？

☑ **8月10日朝、南米コロンビア西部でM7.4の地震発生**

☑ **16県約29万7000世帯が被災**
(UNOCHA* 9月9日時点)

*UNOCHA:国連人道問題調整事務所

- ▶被災者の捜索、救助 ▶緊急医療の提供
- ▶離散家族の再会支援 ▶避難所の設置
- ▶食料の提供と安全な飲料水の確保

被災直後の混乱の中、捜索救助や応急手当に加え、家族再会支援や身元確認の支援などを通じて、家族のつながりや人々の命と尊厳を守ることも赤十字の重要な役割です。

コロンビア
赤十字社の
支援



支える



For INDONESIA

何が起こったの？

地方自治体と協力して避難用テントを設置。避難してきた人々に対応するインドネシア赤十字社のスタッフ ©インドネシア赤十字社

☑ **8月15日早朝、インドネシア東部でM7.7の地震発生**

☑ **被害は7県に広がり、142人が死亡。多くの住民が避難生活**
(BNPB* 9月15日時点)

☑ **9月2日までに1万1185回の余震を観測** (BMKG*)

*BNPB:インドネシア国家防災庁 *BMKG:インドネシア気象気候地球物理庁

- ▶被害状況と住民ニーズの把握 ▶保健医療の提供
- ▶安全な水の確保と衛生環境の改善 ▶こころのケア
- ▶避難所の設置、運営 ▶救援物資の配布

毛布や衛生用品の配布、給水活動などを通じて安全な避難環境の確保を進めるとともに、子どもや高齢者、障害のある人など、特に支援を必要とする人々に配慮した支援や心理社会的支援* (こころのケア) を行い、避難生活を支えています。

インドネシア
赤十字社の
支援

寄り添う



For VENEZUELA

何が起こったの？

子どもたちの笑顔を守ることも赤十字の大切な役割の一つ。被災者の心身の健康と生活再建を支える赤十字スタッフ ©VRC

☑ **6月24日ベネズエラ北中部でM7以上の地震が短時間で2度発生**

☑ **多くの住宅が倒壊などの被害を受け、約2万4000人が避難生活**
(IOM* 9月9日時点)

*IOM:国際移民機関

- ▶安全な水の提供と衛生環境の改善
- ▶保健医療の提供 ▶こころのケア
- ▶安全で尊厳ある生活の再建
- ▶現金給付と生計の立て直し

赤十字は地域住民やボランティアと協力しながら、住居や生計の再建を支援するとともに、心理社会的支援を継続し、人々が尊厳をもって暮らしを取り戻せるよう長期的に寄り添い続けます。

ベネズエラ
赤十字社の
支援

赤十字の取り組み

国境を超えたネットワークで、緊急時から復興まで

今年6月から8月にかけて世界各地で発生している大規模地震。その被災地には、いずれも各国赤十字社・赤新月社の姿があります。

8月10日にコロンビア西部で発生した地震においては、地滑りや道路被害でアクセスが難しい農村部も多くある中、コロンビア赤十字社は、発災直後から捜索救助チームを派遣し活動。現在は、避難所の設置、食料の提供と安全な飲料水の確保など、生活再建に向けた支援へと広がっています。

8月15日に地震被害のあったインドネシアでは、余震が多発する中、避難生活の長期化が予測されています。インドネシア赤十字社は、避難所の設置・運営、保健医療の提供、安全な水の確保と衛生環境の改善などを通じて、その生活を支えています。

6月24日の大地震発生から2カ月以上が経過したベネズエラでは、支援の重点は、復旧・復興へと移行。ベネズエラ赤十字社は各国赤十字社・赤新月社やIFRC (国際赤十字・赤新月社連盟)、ICRC

(赤十字国際委員会)などと連携し、安全な水の提供と衛生環境の改善、保健医療の提供、こころのケア、生活や生計の再建など、被災者の長期的なニーズに応えるために寄り添い続けています。

こうして、災害が起きたその日の緊急救援から、避難所での生活、その先の復興まで、赤十字は被災地に寄り添った支援を続けます。今回取り上げた3つの地震は、いずれもプレート境界や活断層の影響を受ける地域で発生。日本もまた、その地震多発地域に位置する国の1つです。日赤は、これまで数々の地震災害と向き合ってきた経験や知見を生かし、各国赤十字社・赤新月社と共に、災害に備え、被災後に立ち直る地域の力=レジリエンスの強化に取り組んでいきます。



捜索活動に取り組むコロンビア赤十字社 ©CRC



地震発生直後の救援活動から、その後の生活支援まで。コロンビア赤十字社は被災した人々に寄り添いながら支援を届けている ©IFRC/CRC



被災者に救援物資を手渡す赤十字ボランティア ©ベネズエラ赤十字社

海外救援金
受け付け中

詳しくは
コチラ>>>



*心理社会的支援とは

災害や紛争を経験した人々に寄り添い、安心や希望を取り戻すための支援です。赤十字は、話を聴くこと、人とのつながりを支えること、子どもが安心して遊べる場をつくることなどを通じて、心と暮らしの回復を後押しします。物資や医療と並び、人が再び自分らしく生きる力を育む重要な活動です。